



#_i_98ad4e80_#

二人は七輪山からフラワリングビレッジの宿舎に戻ることにした。
ここで次の行動を決めるにあたって、サトゥルヌスを封印した経験者である五行英雄の一人、エスメラルダの助言があった方がよいと考えたからである。

#_i_04c8ad85_#

蓮也は魔力と潜在系エネルギーを使い切ったため疲弊していた。ヘティスも神聖力を使い切っていた。そのため、帰ったその日は、二人とも疲労の回復のために休んだ。
それと、蓮也は諜報部隊長・モローの部下、バツシアから各地の様子を報告を聞いた。

#_i_a219cb30_#

バツシア

「・・・ということです」

蓮也

「わかった。ご苦労であった。引き続き、調査を続けてくれ」

バツシア

「ははっ！」

ヘティス

(この人もモローさんと同じで、窓から入って来て、窓から去って行ったわ・・・w)

#_i_84c3add6_#

夜、風呂と食事を済ませた二人は、お茶を飲んでくつろいでいた。
ヘティスは気がかりなことが一つあった。
未来から来たヘティスは、既存のロータジア史を知っている。そこには、蓮也の恋人であるエウリディーチェは死んではいないと言うことが書かれているのである。このことを蓮也に知らせた場合、恐らく蓮也は彼女の救出に向かうであろう、しかし、それは未来を変えてしまうことになるのであり、それは良い選択なのか、それとも悪い選択なのか、とヘティスは思うのであった。

#_i_b315f508_#

ヘティス

(ここで私が彼女のことを言えば、織り込まれていない時空が発生してしまう)

(通常の場合、言わなくていいし、言わない方が無難なのだけど・・・)

(けど、それは一人の女性の命を見殺しにすることになる・・・)

(それと、エウリディーチェさんの蘇生がサトゥルヌスを倒す場合、何か関係するかどうか。それをしない場合、その時間と労力というリソースを別にかけた方がいいかどうか・・・)

しかし、ヘティスは思った。こうした場合、その人が何かに役に立つかどうかという利害関係、功利主義で考えるべきではない、と。



ヘティスはお茶を飲みながら、そんなことを考えていた。
ヘティスの膝の上にはネコのキキがいて、足下には犬のブーバがすり寄って来ている。

人間にとっての正しい行動原理とは何であろう。
それは、その人にとっての根底にある価値観のようなものである。そうした自分の根底にあるものに立ち戻って考えなくては、良い未来は開けないとヘティスは思った。

しかし、ヘティスにも我欲はある。それは、思春期の少女にとっては当然のことである。エウリディーチェのことを言ってしまうえば、蓮也が自分の手の届かないところへ行ってしまう、と言う考えもあった。彼を自分に振り向かせたい、と思っていた。しかし、もし正しくないプロセスでそれを行うのであるならば、それは私を生きているのではない、とも思えた。

部屋の片隅には、ヘパイトスがスリープモードで蹲っている。膝の上にはキキ、足下にはブーバがいて、目の前には蓮也がいて、ゆったりとお茶を飲んで過ごしている。この時間がヘティスはとても幸せに感じた。

ヘティスは、自分の胸に手を当てると、ハートが綺麗なグリーンになっているのを感じた。

#_i_54744893_#

ヘティス

(パパも友達もない、よくわからない世界に来てしまったけど、この一時(ひととき)は何か幸せだわ・・・)

(幸せ・・・、か)

(より多くの人が長い期間幸せになる、自分も含めたみんなの幸せを考える・・・)

(私だけの幸せは、私だけが決めればいいけど、私が本当に望むのは、それじゃない気がする・・・)

そんなことをヘティスは思っていた。
そして、ヘティスは口を開いた。

ヘティス

「・・・ねえ、蓮也」

蓮也

「なんだ」

ヘティス

「エウリディーチェさんは生きているの・・・」

#_i_b315f508_#

蓮也は少し驚いた様子であったが、すぐに元の表情に戻り、こう言った。

蓮也



「いや、それはない。モローの報告では、エウリディーチェの遺体が王墓に安置されたことが確認されているからな」

ヘティス

「私の未来の記録では、こうなの。エウリディーチェさんは、ゼイソンという魔法剣士によって仮死状態になっているだけなの。そして、その後に蘇生するんだけど、その頃には蓮也は、もう、この世にいないため、彼女も後を追って・・・、ってなってるの」

蓮也

「ゼイソン・・・、爺が、エウリディーチェを魔法によって仮死状態にしたとうことか。多分、爺ならそれが可能だ。そして解除も可能はず。ということは、エウリディーチェは生きているということであり、ゼイソンを探せばいいということだ」

蓮也の声が少し高揚している、それをヘティスは感じた。
そして、何となく悲しくもあった。

#_i_f99f36cf_#

ヘティス

「そのゼイソンの項が、原本のページの紛失か何かで書かれていないの」

蓮也

「王国最強と言われたゼイソンならそう簡単に破れまい。恐らく兵をまとめて、どこかで生きているはずだ」

ヘティス

(このゼイソンって人もトンデモ級の人なのね・・・w)

この蓮也が高く評価するゼイソンという老剣士は、どのような人なのだろうとヘティスは思った。

蓮也

「モローの部下の報告では、ロータジア城は占領されておらず廃虚の状態になっている。だからすぐにでもエウリディーチェの救出は可能だ。しかし、蘇生するには、ゼイソンと同等レベルのリザレクションが必要になる」

ヘティス

「それなら、エスメラルダ先生ならできるかも・・・」

蓮也

「やはり、ここは再び彼女の力を借りるしかないな」

二人は次の日、エスメラルダの治療院を朝早くに訪れ、そして、そのことを話した。

#_i_c48985ab_#

エスメラルダ

「ゼイソン・・・、名前は聞いたことあるわ。ロータジア王国最高位の騎士であり、魔法の力も一流であると噂されている。その方の魔法コードがどれくらいのレベルで、それを私が解読できるかによるわね。後、リザレクションには私の生命力も必要なので、私の命がどこまで持つかにもよります」



蓮也

「いや、貴方の命を削る話ではない。それならゼイソンを探すまでだ」

ヘティス

「けど、ゼイソンは存命であるかはわからないのが現状よ」

エスメラルダ

「もう一つ方法があるわ」

蓮也

「・・・それは何だ」

エスメラルダ

「冥界へ行き、その彼女の霊を探し出し、それを現世に導き戻すのよ」

ヘティス

「そんなことが可能なんですか？」

エスメラルダ

「完全に死んでしまった靈魂を呼び戻すのは不可能だと思うけど、仮死状態であるなら、地獄も天国も行っていないはずだから、まず冥府にとどまるはずよ」

蓮也

「で、冥界へはどのように行くのだ」

エスメラルダ

「このムーガイアには、冥界へ導くことができる者たちが何名かいると聞きます。その一人が月の祠（ほこらに）にいるツクヨミと言う者です。噂では不死であると言われている謎の人物です」

ヘティス

「不死ってことは死なないってことよね・・・。そんな人、本当にいるのかしら・・・」

蓮也

「俺は冥界へ行く」

エスメラルダ

「冥界、黄泉、根の国、ヴァルハラ、言い方は色々あるけど、恐ろしいところよ。生きて帰ってこれる保証はないわ。それでも行くならお行きなさい」

ヘティス

「そう言えば、この前、蓮也は瞑想の中でわかんかなかったかもしれないけど、村を襲った奴が言ってたわ。冥界王ハーデスがサトゥルヌスに力をかしている、と」

エスメラルダ

「あの時のアスモデウスのオーラは、かつてのものよりも巨大で、確かに冥界のオーラを感じたわ」

蓮也

「なるほど、俺も瞑想の中で何か感じていたが、アスモデウス、多分、そいつが俺の腕を麻痺させた奴だ。また、その借りは倍返しにしてやる」

「そして、エウリディーチェ救出のついでに、そのハーデスに話をつけてくるとするか。もし、話が通じなければ、力づくで、そのハーデスにわからせてやる」

ヘティス

「蓮也、アンタ、その自信、どこから湧いてくるの？冥界に行ったことないんでしょ？」

蓮也

「自信がないよりもあった方が目的は達成しやすくなるだろう。ただ、それだけだ」

エスメラルダ



「私がアスモデウスから間接的に感じたハーデスのオーラはとても強大なものです。くれぐれも気をつけて」

蓮也は普段、表情を見せず、何か影すら感じさせるが、それとは対照的に、常に自信に満ちた彼に捉え所のなさを最初は感じた。そして、自信家と言うよりも、むしろ合理主義者である、と本人は言っている。しかし、どの姿の蓮也も、それは蓮也であり、ヘティスは徐々にそれらを理解し、受け入れつつあった。

#_i_07f77d89_#